

話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ

—中日接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から—

楊 虹

キーワード 中日対照 コミュニケーションスタイル 認識のモダリティ
中国人日本語学習者 言語類型論

1 はじめに

大学の授業において、留学生と日本人学生が一つのテーマについて議論する場面が増えており、接触場面の話し合いについて分析した研究も多く見られる（斎藤ら1997, 末田2000, 梶原2003, 佐々木2005, 楊・倉田・佐々木2007, モンルタイら2007等）。話し合いにおいて相手の見解と異なる意見を述べることは、よりよい結論に到達するためには避けられないことである。しかし、この異なる意見、すなわち不同意を表明する発話は、相手の面子を脅かす可能性もあるため、コミュニケーション上の問題を起こしやすいと考えられる。梶原（2003）は、アンケートの結果から、日本人学生との交流活動に参加する留学生（うち90%が中国人）の意見の述べ方が、日本人学生に「直接的な表現や自己主張が強くて少し怖い」（p.93）という印象を与えるとして、学習者と日本語母語話者のコミュニケーション上の問題を指摘している。実際に学習者の不同意表明の仕方を日本語母語話者と比較した末田（2007）、モンルタイら（2007）も、韓国人学習者や中国人学習者の場合、主に直接的／明示的な不同意を表明するため、日本語母語話者に違和感を与えると指摘している。

しかし、同じく直接的に不同意を伝える場合でも、用いる言語形式によって伝わり方が異なる。下記の（1）（2）（3）を比較すれば、同じことを伝える場合でも文末の形式によって主張の強さが異なることがわかる。

- （1）明日行く必要がない。
- （2）明日行く必要がないと思う。
- （3）明日行く必要がないかもしれない。

（1）は、命題そのものを述べたのみであるが、（2）（3）は、命題に「と思う」「かもしれない」といったモダリティを付加しており、話し手個人の認識に限定された意見を示したものの、または不確かさを含む発話であるといった話し手の命題に対する認識が表明され、主張がある程度やわらげられる。

直接的な表現や自己主張が強くて少し怖いと評される学習者の不同意の発話に、こういった言語形式面での問題も考えられるのではなからうか。これまでの学習者の不同意表明発話に関する研究が分析するのは主に発話内容であり、発話の言語形式については分析していない。しかし、前述したように、同じ不同意を伝える場合でも、用いる言語形式によって伝わり方が異なる。そのため、学習者の不同意発話の言語形式に着目した研究も必要である。そこで本研究は、不同意発話の言語形式に焦点を当て、発話文のモダリティの分析を試みる。また、学習者の不同意表明発話のみの分析では、問題の所在をある程度特定す

ることはできるものの、その要因について検討するのは難しいと考え、本研究では、学習者のモダリティの使用を日本語母語話者と比較するだけでなく、学習者の母語場面（本研究では中国語母語場面）でのモダリティの使用とも比較することにした。この3つの場面の比較を通して、学習者の不同意表明発話の特徴を母語の影響も含めて考察することを試みる。本研究では、日本語学習者数が最も多い中国語母語話者の学習者を分析対象として、中日接触場面と中国語母語場面、日本語母語場面という3つの話し合いのデータを比較分析する。

2 中国人学習者のモダリティの使用傾向

日本語記述文法研究会(2003)によれば、モダリティは「表現類型」、「評価・認識」、「説明」、「伝達」の4つに分類される。この分類に基づき、中国人学習者と日本語母語話者の意見文におけるモダリティを分析した伊集院・高橋(2004)は、中国人学習者の場合、評価のモダリティと伝達態度のモダリティを多く使用していると指摘している。

学習者と日本人小中高大生の作文における文末表現を分析した佐々木・川口(1994)は、学習者には、「と思う」を除くすべてのモダリティの使用が日本人大学生より少なく、命題と説明のモダリティで終わる文の比率が大きいと指摘している。「と思う」については、日本人は中学以降にほかの表現に移行していくが、学習者は高い使用率を維持していると指摘している。

一方、山森(2006)は、自然会話、談話完成テスト、Eメールと異なる調査方法を用いて、中国人上級学習者の認識のモダリティの使用について分析した。その結果、次のようなことを指摘している。1. 自然会話では、「と思う」「かもしれない」については、学習者は母語話者と同様に使用しているが、「(し) そうだ」「みだいだ」「らしい」は母語話者と比べ使用が少ない。2. 談話完成テストでは、母語話者が「(し) そう」「みだいだ」等を使う場面では、学習者には断定が多い。3. Eメールでは、「と思う」については、学習者は母語話者と同様に使用している。

また、話し合いの場面における中国人学習者と日本語母語話者の意見表明の発話のモダリティの使用状況を分析した楊・倉田(2011)は、日本語母語話者と異なる中国人学習者のモダリティの使用傾向を指摘している。具体的には、中国人学習者の場合、有標モダリティを付加しない断定的な発話が大勢を占めること、またそれが反対意見を述べる場合でもみられること、という2点に日本語母語話者との異なる傾向がみられた。

上記の研究から、中国人学習者と日本語母語話者のモダリティの使用は作文や会話などにおいて異なるということが明らかになっている。全体的な傾向としては、学習者のモダリティ使用は母語話者より少ないが、「と思う」などモダリティの種類によっては母語話者と同様に使っているものもあること、また、話し合いにおいて、有標モダリティを付加せずに反対の意見を述べる場合が顕著にみられることがわかった。しかし、山森(2006)の分析対象は自由会話であり、楊・倉田(2011)は話し合いの発話全体を分析したものであり、コンフリクトが生じやすく相手への配慮がとりわけ必要な不同意発話に焦点をあてた研究は管見の限りまだない。

3 本研究の目的と研究方法

3-1 研究目的

前述したように、不同意の意見を伝える場合、話し手の心的態度を示すモダリティの使い方によって相手の受ける印象は異なる。そこで、本研究では、中日接触場面、中国語母語場面、日本語母語場面という3つの場面にみられる不同意表明の発話をモダリティ使用の観点から分析を行い、それぞれの特徴を明らかにする。具体的には以下2つの課題を設けて分析をする。

1. 課題1. 中日接触場面の中国人学習者 (CL) と日本人 (JNS) 及び、中、日それぞれの母語場面の不同意表明発話におけるモダリティ全体の使用状況はどのようなものか。
2. 不同意表明発話に現れるモダリティの種類の使用にどのような違いがあるか。

3-2 研究方法

3-2-1 データ

分析には、同じく課題達成型の話し合いのデータを用いた。同質のデータとなるよう、討論の参加人数、性別等を揃え、選択肢の中から一つの地域を選ぶというほぼ同一の課題を与えた。接触場面及び中国語母語場面のデータは、研究のために募集した参加者によるもので、日本語母語場面のデータは、授業中に実施した話し合いを収録したものである。

まず、接触場面のデータとしては、中国の某大学で行われた課題達成型グループ討論6組 (各グループCL2名、JNS2名、友人同士、全員女性) の録音・録画資料 (計120分) を用いた。討論の課題は、20分以内に「中国で日本人大学生を案内する場所を一つに決める」ことである。CL (CL1~12, 計12名) は、日本語専攻4年生で、日本語のレベルは中上級である。JNS (JNS1~JNS12, 計12名) は当該大学の語学留学生であり、中国滞在歴は1ヶ月から1年である。

中国語母語場面のデータと日本語母語場面のデータは、それぞれの国の大学で収録し、同じく女性4人の友人同士の話し合いの録音・録画資料である。中国語母語場面では5組 (計100分) で、課題は中日接触場面と同じである。日本語母語場面では3組 (計60分) で、課題は、「海外の日本語教育実習で行きたい国を一つ決める」ことである。中国語及び日本語母語場面の会話例では、それぞれの母語話者参加者は仮名 (名字) で示される。

3-2-2 分析方法

本研究では、相手の見解や提案に対して、反論・問題点の指摘など否定的評価を下す発話、または議論を相手の見解や提案とは相反する方向に持っていく発話を不同意の発話と定義する。

まず、録音・録画資料から文字化資料を作成し、上述の定義を基にそれぞれの不同意の発話を抽出した。

モダリティの分類について、日本語は、主に日本語記述文法研究会 (2003) の分類を参考に、大きく「表現類型」、「評価」、「認識」、「説明」、「伝達」の5つの分類を設けた。「表現類型」の疑問については、他のモダリティの分類に該当しない疑問文のみ該当する。また、丁寧さのモダリティについては、本研究では扱わない。

また、日本語記述文法研究会 (2003) の分類は、主に文末のモダリティを対象にしてい

るため、言いさし・中途終了発話や陳述副詞のモダリティとしての伝達機能については言及していない。本研究ではこれらもモダリティの範疇に入ると考え分析の対象とする。

言いさしは、「けど」などの終助詞的用法のものや、後件である主節が省略された場合の発話を指し、強い断定を避け、語気を和らげる働きをする（白川2009）。また、宇佐美（1995）、高木（2012）等では、主節が省略されたものや、主節の述部が文の末尾に現れていない発話文を中途終了発話としている。すなわち、言いさしと中途終了発話の包含する発話に一部重なりがみられ、研究者によって異なる用語が用いられている。これらの言いさし・中途終了発話は、断定を避け、発話を緩和する役割を果たし、言い切りの無標モダリティの文と対人関係の面で果たす役割が異なる（森山2000）と考えられるため、本研究では、有標モダリティの機能を果たすものと捉え、新たに「その他中途終了」という分類を加えることにした¹。

また、陳述副詞について、森山（2000）は「たぶん」等副詞によって不確かさ等モーダルな意味があらわされる文となんの付加形式のない無標の断定の文の違いを指摘している。また、杉村（2009）は、陳述副詞「たぶん」、「もしかすると」等を、蓋然性を表す「モダリティ副詞」と位置づけている。一方で小池（2014）は、「おそらく」「まさか」等のモダリティ副詞に特定の推量の打消し表現と呼応するもので、推量のモダリティ副詞としている。本研究では、「たぶん」「おそらく」等を蓋然性を表すモダリティ表現と捉え、認識のモダリティの低位分類である蓋然性に分類する。

一方、中国語のモダリティは、彭（2012）によるPalmerのモデルをベースにしたモダリティ体系の分類がある。彭（2012）の分類では、中国語のモダリティの意味機能の分類は、「事象モダリティ」と「命題モダリティ」の二つに大別される。

事象モダリティは、さらに主体が行為を行う能力や意志・願望に対する発話者の判断を示す「能願性」のモダリティと事象の発生に対する発話者の価値的判断を示す「義務性」のモダリティに分けられるが、前者は日本語ではモダリティとして捉えていないため²、本研究では分析の対象としない。後者は、日本語のモダリティの分類では、行為系や評価にあたる考えられ、日本語の分類の枠組みに基づき、再分類する。

「命題モダリティ」は、命題の真偽に関する確定性の度合いと根拠を示す話者の判断であり、さらに認識性と証拠性に分けられ（彭2012）、日本語の「認識のモダリティ」にあたる。一方で、日本語の「のだ」文を代表とした説明のモダリティや、伝達のモダリティは、意味機能にフォーカスした彭（2012）の分類には含まれていない。説明のモダリティは、中国語では「是～的」構文のほか、接続詞等でその機能を担うため、課題2の各モダリティの種類別の生起頻度の分析では、対象としない。伝達のモダリティは、彭（2012）では、分類には入れていないものの、中国語の文末語気詞と日本語の終助詞の機能的共通性を指摘している。本研究では中国語の文末語気詞が日本語の伝達のモダリティに対応するものであるとし、分析の対象とする。

また、中国語の中途終了発話については、荻原（2013）を参考にした。荻原（2013）は、途中で終了している言語形式上不完全なものとして、中国語と日本語の「言いさし」を分

1 研究によって、体言止めの発話を中途終了とするもの（荻原2012）があるが、本研究は有標モダリティの付加の有無という観点から分析しており、体言止めの発話には有標モダリティの付加がない断定という同じ機能を果たすため、中途終了としない。

2 日本語では、動詞「できる」や助動詞「られる」「～たがる」等で示す。

析している。荻原（2013）では、表現形式として、倒置、省略の質問、名詞のみ、述部抜け、副詞・接続詞・助詞終わりを言いさしとして分析しているが、本研究では、述部抜け、接続詞終わりを発話が終了していない言語形式上不完全なものであるとして判断し中途終了発話とする。名詞のみは体言止めの文であり日本語の言いさしの分析では対象としないため中国語でも対象としない。また、その他の形式は中国語の統語的観点からみて慣習的な省略表現であるため、本研究では中途終了とはしない³。

本研究におけるモダリティの分類を表1に示す。

表1 日本語のモダリティの枠組みと主な言語形式

モダリティの分類			日本語の主な言語形式	中国語の主な言語形式
表現 類型	情報系	叙述	平叙文[無標]	平叙文[無標]
		疑問	疑問文	疑問文反語文（难道/不是…吗）
	行為系	意志	（よ）う	（一定）要
		勧誘	（よ）う・ないか	吧
		行為要求	なさい・てくれ	一下
評価		べきだ・なくてはいけない	可以・最好・比较好	
認識	断定 推量		断定形（φ）[無標] かな・だろう（か）・じゃない（か）	断定形（φ）[無標], 好像・吧
		蓋然性	かもしれない・にちがいない・たぶん・もしかすると	也许・可能・不一定・应该
	証拠性	観察・推定	ようだ・らしい・（し）そうだ	好像・看来・看上去・看样子
		伝聞	（する）そうだ・（する）って	听说・据说
	思考動詞		と思う	觉得・感觉・想・认为
説明のモダリティ		の（だ）・わけだ	是～的	
伝達のモダリティ		ね・よ・よね	呢・嘛・啊・呀	
その他中途終了		けど・から	未完の文	

次に、研究課題の分析方法について述べる。

課題1では、まず、不同意の発話について、有標モダリティの付加の有無を調べる。

有標モダリティ付加あり：有標モダリティ使用または中途終了発話

有標モダリティ付加なし：断定形の平叙文

課題2では、表1の枠組みに従って種類別使用率（出現回数／有標モダリティ付加ありの発話数）を求め、中、日母語場面と接触場面のCLとJNSにどのような違いがみられるか、より詳細に分析する。

3 たえば荻原（2013）では、「名詞のみ」の例として、相手の出身地を繰り返す発話「河南」、助詞終わりの例として、「的」以下の名詞を省略した「考一样的」などが例として示されている。

4 結果及び考察

4-1 不同意の発話におけるモダリティの使用状況

接触場面の不同意発話数は67（CL37, JNS30）であった。中国語母語場面の不同意発話数は119で、日本語母語場面の不同意発話数は39であった。1回20分の討論における平均の生起頻度は、接触場面11, 中国語母語場面24, 日本語母語場面13であった。

モダリティ表現の使用状況をみると、日本語母語場面と接触場面の日本人参加者の場合、不同意発話に有標モダリティを付加する割合が8割を超えるのに対して、中国語母語場面と中国人学習者CLの場合、有標モダリティの付加は5割強にとどまる。すなわち、中国語母語場面と接触場面のCLの不同意発話の約半分が有標モダリティを付加せず断定的に発話されている。

表2 モダリティの使用状況

	中日接触		中国語母語	日本語母語
	CL	JNS		
有標モダリティ付加あり	51%	83%	57%	87%
有標モダリティ付加なし	49%	17%	43%	13%

日本語母語場面では、モダリティを付加しない不同意の発話が1割強にとどまり、少ないと言える。そもそも断定的に不同意を述べる発話にどのようなものがあるか、ここで、有標モダリティ付加なしの不同意発話が見られる場面を検討していく。

会話例1は、海外での教育実習で行きたい国を決める課題で、どこにすべきかということについて話し合う場面である。ここで、田中は英語で説明できることをメリットとしてあげ、英語圏の国が良いと主張する。それに対して木村は、→で示した発話で不同意を示す。非常に長いターンを取り発話しているが、実際には4つの発話文によって構成される。発話をまとめると、①英語で補足説明したとしても英語の細かいニュアンスまでわからない（7, 9, 11）、②誤解をなくすために直接法が取られている（13）、③自分では誤解を与える心配がある（15, 17）、④逆にしゃべれないほうが日本語を純粋に教えられる（19）、となる。この4つの発話のうち、有標モダリティ表現を伴わないのは、自分のことについて言及している場合のみである。すなわち「英語のニュアンスって知らない」と、「わたしが英語でしゃべったらなんかそういう心配もある」という2文だけだった。モダリティを付加しない断定の発話は、仁田（2000）では、確言として命題内容を確かなものとして捉え、成立させたものという話者のとらえ方を示すと指摘している。ここでは、確言の発話は、話し手の個人的な事情や心情を語る発話であるため、断定的に述べられていても相手にはそれほど強い主張と感じられないのではないだろうか。

会話例1 【日本語母語場面】英語で教えること

- 1 田中 で（）どうしても日本語だけだと通じ切らないところが
- 2 木村 ん：
- 3 田中 あったときに（）ちょ（）ちょっと一言「言っただけで（）」
- 4 佐藤 [んそうね：

- 5 田中 向こうの理解が高まるってありそうだから やっぱ [できるにこしたことはないのかも。
6 木村 [でもさ
→ 7 木村 やっぱ 例えば英語で：補足説明したと
8 田中 ん：
→ 9 木村 しても：私自分らもさ：あの.英語のさ [ニュアンスって知らない
10 田中 [うん
→ 11 木村 [細かく。
12 田中 [わかんないね。
→ 13 木村 だから () そういう誤解をなくすために [直接法がとられてるらしいけど。
14 田中 [ん
→ 15 木村 [だったらなんかすごい誤解を生みそう わたしが英語でしゃべったら
16 田中 [ん
→ 17 木村 h [hh.hなんかそういう心配もある。
18 田中 [hhh
→ 19 木村 逆になんもしゃべれない方が [日本語に純粹に教えられるような気も。
20 田中 [ん
21 田中 どうなんだろう。向こうの言語ってのは () ほんとに考えない () 感じなのかな：
22 田中 わかんないね。

会話例2は、接触場面のCLによる不同意発話がみられた例である。JNS7が、雲南省の良さを「観光名所」だと述べたのに対し、CL7は「でも歴史はありません」と有標モダリティを付加せずに、断定的に不同意を表明する。すると、JNS7、JNS8はともに「あ：：」とあいづちを打つにとどまる。その後、1.5秒の沈黙が起こっている。CL7のこの有標モダリティを付加しない確言の発話は、「雲南省は歴史がない」という命題を「事態の成立・存在を疑いのはさみよのないもの、確認済みのものとして捉え」(仁田2000) たことを示すものであるが、実際には、雲南省に歴史があるかどうかについては、人によってはとらえ方が異なる可能性もある。しかし、CL7のように言い切りの形で述べると、この命題内容を話し合いのステージに載せることが難しくなり、それが強い不同意表明として聞かれ、議論が一時中断に陥ってしまう。

会話例2 【接触場面】雲南省①

- 1 JNS7 観光名所かな
2 CL7 うん
3 JNS7 雲南省は
→ 4 CL7 でも歴史はありません
5 JNS7 あ：：
6 JNS8 あ：：
(1.5)

会話例3は、中国語母語場面の1例である。王の勤める場所について陳は、どのような特

産品があるかと聞き、その返答である「宝飾品」に対して、時代遅れだと否定的な評価を下す。この発話も言い切りの形で提示され、その後2秒の沈黙が生じた。しかし、不同意発話を受けた王はさらに自らの主張を続けた(4, 5)。

会話例3【中国語母語場面】特産品

	【中国語発話】	【日本語訳】
1	陳 那边有什么特色东西呢?	あちらどんな特産品があるかね。
2	王 财宝 hhh	宝飾品hhh
→3	陳 财宝过时了。hhhh (2)	宝飾品は時代遅れだ。hhhh
4	王 有的。哪个哪个风景区没有一点那种。	あるはず。どの観光地にもああいう(特産品類)は多少あるでしょう。
5	王 随便什么风景区都有的	どのような観光地でもみなあるの。

中国語母語場面では、断定的な不同意意見をを受けた参加者がさらに主張を続けることで、話し合いは継続していく。では、接触場面の会話例2の1.5秒の沈黙のあとの流れはどのようなものだろうか。

会話例4は会話例2の続きを加えたものである。1.5秒の沈黙のあと、CL8は「歴史がない」というCLの発話に、正面から「あります」とまた不同意を断定的に示した。それに対して、JNS8は笑いで応じたがJNS7からは反応がみられず、これ以降、CL7が異なる候補地を提案した。日本語母語話者にとって、この会話例のようなCL7の不同意発話が強く感じられると同時に、CL7とCL8のストレートな不同意の反論のやり取りにも違和感を抱くのではないだろうか。

会話例4【接触場面】雲南省②

1	JNS7	観光名所かな、	
2	CL7	うん	
3	JNS7	雲南省は。	
4	CL7	でも歴史はありません。	
5	JNS7	あ：：	
6	JNS8	あ：： (1.5)	
→7	CL8	あります。たぶん古い時代からhh [h	観光地として
8	JNS8	[hhhhhh	hhhhhh

会話例4でみられた接触場面の中国人学習者の振る舞いは、中国語母語場面の会話例3と極めて似ている。中国語母語場面では、モダリティ表現を付加しない断定的な不同意発話が高い頻度で見られるが、会話例3でみたように参加者は互いにそれに対応した参加のし方をしている。そして、接触場面の中国人学習者同士のやり取りも、中国語母語場面と類似したパターンがみられ、中国語母語場面のコミュニケーションスタイルが接触場面の

CLの不同意表明発話に影響を与えていることが推察される。しかし一方で、日本語母語場面では、モダリティを付加しない不同意発話の生起する文脈は限られており、モダリティ表現を付加し相手に配慮して意見を伝えることが基本である。このような不同意表示のスタイルに違いがあるため、CLの強い不同意発話に、日本語母語話者が戸惑い、場合によってはマイナス評価を下してしまうこともあるのではないだろうか。

4-2 不同意の発話におけるモダリティの種類

本節では、接触場面及び中国語、日本語それぞれの母語場面における不同意発話に使用されるモダリティ表現の種類及び頻度から、それぞれの使用傾向を分析し、中国人学習者のモダリティ使用をさらに詳しく考察する。図1は各モダリティ表現の生起頻度（モダリティ表現の生起数／モダリティを伴う発話数）である。ここでは、まず中国語母語場面と日本語母語場面で最も多く用いるモダリティを比較し、次に接触場面のCLのモダリティの生起傾向と比較する。

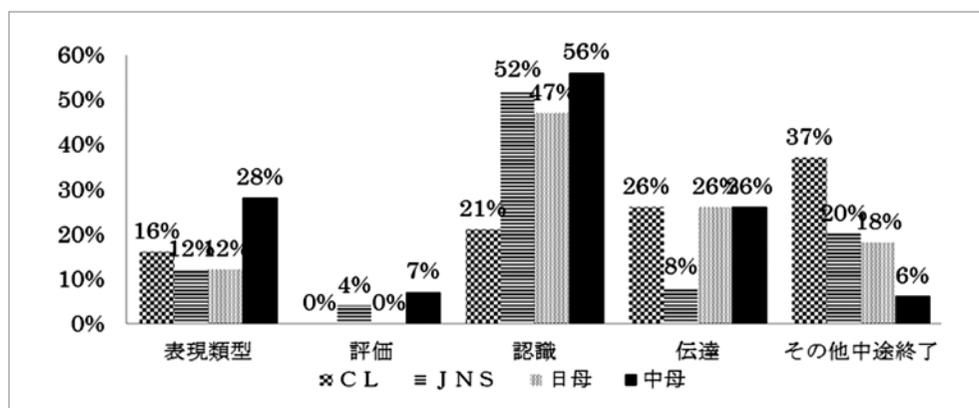


図1 モダリティの種類別の生起頻度

図1をみると、日本語母語場面では、認識、伝達、その他中途終了、表現類型の順に使用が多く、評価は生起していない。中国語母語場面では、認識、表現類型、伝達、評価、その他中途終了の順に使用が多い。ここでは、日本語母語場面と中国語母語場面の共通点として、認識のモダリティの生起頻度がいずれも5割を超え、最も高いことが指摘できる。また伝達の生起頻度もほぼ同じである。次に相違点についてみると、中国語母語場面では、表現類型の生起頻度が比較的高いことがわかる。これは、中国語母語場面では、疑問を呈する形で不同意を示すことが比較的多いことによる。また、その他中途終了については、中国語母語場面では少ないことも大きな違いの一つである。

一方で、接触場面のCLの生起傾向をみると、生起率が最も高いのはその他中途終了であり、中国語、日本語どちらの言語の母語場面よりも中途終了発話が多く生起していることがわかった。一方で、両母語場面で最も高い生起率を見せた認識の頻度は2割と比較的低い。接触場面のCLの生起傾向は、中国語、日本語母語場面いずれとも異なる結果となっている。本節では、中国語母語場面とも日本語母語場面とも生起の傾向に違いがみられた

認識のモダリティとその他中途終了について、具体的な言語形式を検討しつつ、より詳しく考察していく。

4-2-1 認識のモダリティ

認識のモダリティには、さらに4つの下位分類があり、それぞれ推量、蓋然性、証拠性、思考動詞である。表3では、4つの下位分類それぞれにみられる言語形式と回数を示している。

まず、中国語と日本語母語場面では、用いられる認識のモダリティの意味機能に違いがみられた。中国語母語場面では、思考動詞の使用頻度の高さが目を引く。次いで蓋然性、推量、証拠性の順となっている。一方の日本語母語場面では、証拠性が最も多く、次いで推量、思考動詞の順で使用がみられ、蓋然性はみられない。そして、接触場面のCLの場合、思考動詞、蓋然性、推量・証拠性の順となっており、中国語母語場面と類似した傾向がみられた。山森（2006）は、中国人上級学習者の日常場面の自然発話を分析し、「と思う」「かもしれない」はJNSと同様に用いているが、「(し) そうだ」「みたいだ」「らしい」の使用率はJNSと比べて低いとしている。「かもしれない」は蓋然性のモダリティであるが、本研究では「かもしれない」はみられないものの、同じく蓋然性を表す「たぶん」がみられ、多用されるモダリティの機能に関して、山森（2006）と同様の傾向を示しているといえる。また、その多用の傾向に、中国語母語の影響が否定できないと考える。

表3 認識のモダリティの下位分類と形式

	中国語母語	接触場面CL	日本語母語
推量	会（会・・的）（3） 吧（4）	でしょう （1）	かな（3） じゃないか（1）
蓋然性	也许（1）肯定（3） 可能（7）不一定（6） 应该（3）	たぶん（2）	
証拠性	観察・推定 好像（1）	感じ（1）	らしい（1）（し）そう（1） よう（だ）（1）みたい（な）（1） 感じ（1）気がする（1）
			伝聞 っていう（4）
思考動詞	觉得（19） 感觉（5）想（1）	と思う（3）	と思う（1）

(回数)

表3をみると、中国語では、認識のモダリティは、推量の「吧」「会・・的」の「的」を除いて、基本的に述語の前に用いられる副詞（也许、肯定、可能、不一定、好像）や、助動詞（应该、会）または思考動詞である。SVO語順を取る中国語では、モダリティ表現は、述語が発されるまでに表れるもので、すなわち、発話内容を計画する段階で認識のモダリティの使用有無を決定するものである。一方で、日本語の場合、陳述副詞を除けば、認識のモダリティは、主に助動詞、終助詞、思考行動である。SOV語順を取る日本語では、述語は最後に現れ、助動詞は述語動詞のあとに続くため、モダリティは文末に付加される。

すなわち、話し手は発話していく中で、発話内容や、相手の反応などを見ながら、モダリティ表現を付加していくことが可能である。この中国語と日本語の認識のモダリティの生起位置の違いにより、学習者にとってモダリティの使用がより難しくなったと推察する。学習者の場合、認識のモダリティを使用すべきところ使用しないため、結果的に不同意発話全体において断定的な発話が多く生起することにつながったのではないだろうか。

4-2-2 その他中途終了発話

接触場面のCLにおいては、その他中途終了の生起率（37%）は最も高く、日本語母語場面や接触場面のJNSの2倍ほどである。一方で、中国語母語場面では6%と生起率が低い。

日本語母語場面及びCLのその他中途終了発話には、①従属節で終わるが文脈から後件の主節がないもの、②従属節で終わり、文脈から後件の主節が補完できるもの、③主節の述語や助動詞等が省略され不完全な形で終わるもの、と3つのタイプがみられる。以下ではそれぞれの発話例を示す。

①従属節で終わるが、文脈から後件の主節がないもの

(4) でも西安は良いと思いますが (CL)

(5) だから、そういう誤解をなくすために、直接法が取られてるらしいけど (日本語母語)

(4) では、西安を推す立場で、西安が良いという主張である。(5) では、英語のニュアンスの違いによって生じる誤解をなくすために、直接法が取られているらしいという主張である。これらの文は、実質的には完了した文であり、白川 (2009)、田 (2013) 等では「言い終わり」、荻原 (2012) では「助詞終わり」としているものである。

②従属節で終わり、文脈から後続する主節が補完できるもの

(6) うんそうよね。私は行ったことはないから (CL)

(7) でも、なんか、私もなんかタイとか東南アジアとか、発展途上国に行ってみたいと思うけど、日本 日本語を教えるかといったら、タイ語全然わかんないし (日本語母語)

(6) では、行ったことがないから、よくわからないという趣旨の発話だと考えられ、主節の部分である「よくわからない」が省略されている。(7) では、「タイ語が全然わかんないし」のあと、難しいだろうという主節が後続すると思われ、その主節が省略されている。

③主節の述語や助動詞等が省略され不完全な形で終わるもの

(8) たぶん古い時代から観光地として (CL)

(9) 中国はなんか広くてなんとなく (日本語母語)

(8) では、「観光地として有名だ」と推測される発話で、「有名だ」などといった述部が続くと考えられるが、その部分が省略されている。(9) では、なんとなくのあと、「よく

わからない」等の否定的な表現が述語として予想されるが、その部分が省略されている。

一方で、中国語母語場面では、③主節の述語、目的語等が省略され、文が不完全な形で終わるもののみである。中国語の接続詞は文頭につくため、①のような実質的に完了した文に接続詞を付加するものはない。また、②がみられず、③のみがみられるのも接続詞が文頭に来るからである。まず③の例をみよう。

(10) では、逆接の接続詞「但(しかし)」以降の成分は述語、目的語等が続くはずだが、実際には発話はここで途切れた。また、(11)では、助動詞の否定形「不能(～てはいけない)」の後に動詞述語が続くはずで、それがないため、発話文は不完全な形で終わる。

(10) 但是西安给我的感觉就是它是有旅游的东西，但～

訳：しかし西安が私に与える印象は、それには確かに観光資源はありますけど、(～)

(11) 不是，我们一定要从优缺点各方面来看hh不能hh～

訳：違います。私たちは必ず良いところ悪いところとさまざまな観点から見なければならぬ。(～)してはいけない。

中国語の場合、(10)(11)では、後節の述語の省略が明らかであるが、「但(しかし)」や「不能(～てはいけない)」等の接続詞、助動詞が表れない場合、下線部の部分は、完全なる発話文とみなされる。そのため、仮になんらかの理由で後節の発話が見られない場合であっても、前節のみで発話が完了しているとみなされ、②のような中途終了発話はみられない。

以上みてきたように、その他中途終了の発話においては、日本語との異なる言語類型の特徴の影響により、中国語ではほとんどみられない。一方で、CLには、中途終了発話が日本語母語場面同様にみられた。荻原(2012)では、中国人学習者は、「助詞終わり」の言いさしが比較的容易に使用され、発話機能にあいまい性がある「から」「けど」などの文末配慮表現については日本語母語話者と同割合の使用がみられたと報告している。本研究でも、①のような完了した発話に「が」を付加して、断定的に述べるのを避けるものもみられ、発話を緩和するストラテジーを学習者も積極的にとっていたといえよう。ただし、中途終了発話に学習者要因も考えられる。すなわち、目標言語による語彙等の産出が困難で発話を継続できないために生起する場合も考えられる。たとえば、③の場合、否定的な発話が後続する場合あえてそれを言わずに、述語を省略する場合(9)もあれば、CLの場合、後続発話は否定的ではない場合でも省略(8)が生起している。CLの場合、適切な表現が見つからず発話を完成できなかったため生起したということも考えられる。言語能力の影響で発話を継続できなかった場合でも、中途終了発話は、モダリティ表現を付加しない言い切りの発話よりは、結果的に断定的な印象を与えにくく、発話を緩和する役割を果たしている。

以上、中国語、日本語母語場面では最も多くみられる認識のモダリティと中国人学習者に最も多くみられるその他中途終了発話を詳細に分析した結果から、中国人学習者のモダリティ使用の特徴を考えてみたい。認識のモダリティは、文末に付加することにより不確かさや曖昧性などを加え不同意の発話を緩和するものである。このような役割を果たす認

識のモダリティを「足し算」のモダリティとすれば、最後まで言い切らない中途終了・言いさしは、「引き算」のモダリティと言えよう。学習者にとって、断定的な表現を避けるためには、「足し算」方式でモダリティ表現を付加することより、最後まで言い切らない「引き算」方式でその他中途終了発話をしたほうが認知的負担が低いと考えられる。そのため学習者が最も多く使用するモダリティ表現となったのではないだろうか。

5 まとめ及び今後の課題

本研究では、話し合いにおける中日接触場面と中国語、日本語それぞれの母語場面の不同意発話のモダリティの使用状況を分析した。その結果、不同意発話の生起頻度については、中国語母語場面のほうが高く、接触場面と日本語母語場面の2倍近くあることがわかった。また、中国語母語場面と接触場面のCLにおいては、モダリティ表現を付加せず、命題のみで断定的に不同意を示す発話は不同意発話全体の5割近く占め、日本語母語話者との間に大きな開きがみられた。中国語母語場面では、話し合いの参加者が互いの意見に命題のみの発話で不同意を示し合う場面がみられ、断定的に不同意の意見を伝えることに対して、中国語母語話者はためらいをそれほど持たないことが示唆された。そして、中国人学習者の不同意の表明のし方に上記のような母語のコミュニケーションスタイルの影響が考えられる。中国語母語話者のこの不同意表明の仕方は、日本語母語話者には、断定的で主張が強いと受け取られる可能性が高く、そのため話し合いが円滑に行われられなくなってしまう恐れも考えられる。

また、それぞれの場面で生起するモダリティ表現を分類しその傾向を分析した結果、中国語、日本語母語場面では、多用するモダリティの種類に共通点がみられ、事態のとらえ方を伝えるのに認識のモダリティを最も多く用いるということが明らかになった。しかし、接触場面のCLには認識のモダリティより、中途終了の発話の生起が多かった。中国語と日本語の語順が異なるため、学習者にとって、発話を構成する際、文末に認識のモダリティを付加していくことは難しいということが示唆された。中国人学習者がモダリティ表現を使うべきところ使わずに、断定的に不同意の意見を述べるのも、こういった語順の影響が考えられる。一方で、発話を最後まで言い切らない「引き算」方式の中途終了発話は、学習者にとって産出しやすいことが推察された。

接触場面の討論において、参加者は互いの意見を活発に述べ合いながらも協調的に討論を進めることが大切で、それがよりよい人間関係の構築にもつながると考えられる。そのためには、学習者と母語話者の双方が、自分の会話のスタイルと相手の会話のスタイルの違いや、また双方が異なるスタイルをどのように受け止めているかといったことを意識し理解を深めることが重要である。本稿では、日本語教育の現場において、個々のモダリティ表現の意味機能を教えるだけでなく、モダリティが会話において用いられる実際の場面を取り上げることが提唱したい。その際には、学習者の母語での用い方や、母語の言語类型的な違いとの関わり等と結び付け、母語と目標言語を比較しながら、その違いを提示することも必要であろう。たとえば、文末に付加することで断定的になることを避ける証拠性のモダリティの機能を明示すること、中途終了発話の効果的な使用を提案することなどが考えられる。特に、中途終了発話は、断定的な発話を避ける役割を果たし、学習者にとって認知の負担も低いため、相手への配慮を示す必要がある文脈で、中途終了発話の効果的

な使用を明示的に教えることが有効であろう。ただし、その際には、日本語と中国語のコミュニケーションスタイルの相違の理解がまず必要であり、また日本語のコミュニケーションスタイルへの同化を強要するものではないという教師側の立場も学習者に明示すべきであろう。

本研究はデータ数も少なく、本研究の結果を一般化することはできないため、今後さらにデータを増やして分析する必要がある。特に接触場面の学習者は、日本語能力が中級から中上級レベルで、中国国内で日本語を学ぶ学習者であることによる制約があると考えられ、今後、より高い日本語能力を持つ学習者や、日本国内で学ぶ学習者等のデータを収集し、比較分析する必要がある。また、今回は不同意発話のみに注目したが、今後は、意見表明発話全体に広げて分析を行って行きたい。

付記

本研究のデータは、下記において収集したものです。

1. 科学研究費補助金研究（平成18年度～20年度基盤研究B），課題番号：18320080「多文化共生社会における幼児から大学生までのコミュニケーション能力育成モデルの開発」（研究代表者：佐々木泰子）
2. 科学研究費補助金研究（平成24年度～26年度基盤研究C），課題番号：18320080「中国語教育への社会的要請に応じるコミュニケーション能力育成のための日中対照研究」（研究代表者：楊虹）

本研究は、2014年7月シドニー工科大学にて開催されたシドニー日本語教育国際研究大会でのパネル発表『言語類型論からみた談話と言語教育—モダリティの表現を中心に—』の楊発表部分の内容を基にまとめたものです。パネルの呼びかけ人及び共同発表者である遠山千佳氏には貴重なご助言をいただき、ここに記して感謝いたします。

文字化資料の記号

[発話の重なり
(.)	短いポーズ
(数字)	沈黙の秒数
(漢字)	発話をわかりやすく示すために分析者が省略等を補足した部分
h	笑い hの数で笑いの長さを示す
.h	吸気
:	音の引き延ばし
?	上昇イントネーション
→・下線	注目してほしい箇所

参考文献

- 伊集院郁子・高橋圭子 (2004) 「文末のモダリティに見られる “Writer/Reader visibility” — 中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較 —」 『日本語教育』 123号, 86-95
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」 『昭和女子大学学苑』 662, 27-42
- 荻原稚佳子 (2012) 「日本語自由会話における「言いさし」使用と解釈の難しさ— 中国語母語話者の場合」 『明海大学外国語学部論集』 24, 17-33
- 荻原稚佳子 (2013) 「中国語母語話者の中国語自由会話における言いさし使用—日本語会話との比較から考える普遍性と個別性」 『応用言語学研究：明海大学大学院応用言語学研究科紀要』 15, 131-143
- 梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」 『日本語教育』 117, 93-102
- 小池康 (2014) 「一語文での使用から見たモダリティ副詞の意味—「やきつけ」という観点からの考察」 『関東学園大学紀要』 22, 1-12
- 斎藤みちる・徐愛紅・埴田美有紀・大浜るい子 (1997) 「談話分析から見た異文化間コミュニケーション—日本人の言語行動を中心に—」 『広島大学日本語教育学科紀要』 7, 185-193
- 佐々木泰子 (2005) 「討論における「じゃ」の考察—討論の談話とフォローアップ・インタビュの質的分析を通して—」 『共生時代を生きる日本語教育—言語学博士上野田鶴子先生古稀記念論集—』 486-500
- 佐々木泰子・川口良 (1994) 「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」 『日本語教育』 84, 1-13
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版
- 末田美香子 (2000) 「初対面場面における不同意表明と調整ストラテジー」 『日本語教育論叢』 16, 23-46
- 杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』 ひつじ書房
- 高木丈也 (2012) 「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる「中途終了発話文」の出現とその機能」 『社会言語科学』 15(1), 89-101
- 田昊 (2013) 「「言いさし」のけど類の使用実態に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」 『日本語教育』 156, 45-59
- 仁田義雄・森山卓郎・工藤浩 (2000) 『日本語の文法 (3) モダリティ』 岩波書店
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 モダリティ』 くろしお出版
- 彭国躍 (2012) 「中国語モダリティの機能体系—PaLmerモデル適用の試み」 富谷玲子・堤正典 (編) 『モダリティと言語教育』 63-80, ひつじ書房
- テンヂャローン モンルタイ・楊虹・倉田芳弥 (2007) 「中日接触場面の課題達成型討論における反対意見表明の分析」 『第16回小出記念日本語教育研究会予稿集』 46-50
- 山森理恵 (2006) 「認識のモダリティの使用について—日本語学習者と日本語母語話者の使用の比較を通して—」 『東海大学留学生センター紀要』 26, 73-85
- 楊虹・倉田芳弥・佐々木泰子 (2007) 「グループ討論における沈黙の分析」 『国際行動学研究』 2, 27-38

楊虹・倉田芳弥（2011）「中日接触場面の討論における意見表明の仕方—学習者と日本語母語話者のモダリティ使用の観点から—」『社会言語科学会第28回大会発表論文集』
24-27